

ジュニアパイロット

妻の妹、こうちゃん、とくちゃん、弟のやつちゃん、結婚して独身の妹と四人、東京で暮らして居る。私達の子供は男の子だけが、こうちゃんと、とくちゃんには男の子と、女の子が一人ずつ二人、やつちゃんは女の子二人の子持ちだ。妻は女の子も欲しいと言っていたが、男の子二人で、後は生まなかつた。

洋一は東京で電気工事会社に勤め、二郎は大学在学中の頃、叔父叔母の家を訪問、いろいろ世話になっていた。

洋一は子供達とよく遊び相手になり、親以上に世話をする。中古の軽自動車に乗っていたが、皆で出かける時など、親の普通乗用車に乗らず、洋一のオンボロ軽に乗り込む。

ある年の夏休み、こうちゃんが長男をしばらく我が家に置いて行った。翌年は洋一が、こうちゃんの子供二人を乗せてきた。その翌年は、とくちゃんにも同じ年頃の子供二人いて、親が送ってきた。二才から五才までの子供4人、まるで保育所だ。それから一ヶ月賑やかな事、妻は久しぶりの子供の世話である。



楽しい夕食



松島遊園地にて

我妻研と香の兄妹。菊地征彦と章子の兄妹は一太郎二姫で、どちらも同じ位の年齢である。子供たちの仙台での夏休みは、その後恒例行事になった

征彦と研は五才、香は三才、章子は二才。八月三日は香の三歳の誕生日、お祝いをやった。

仙台での一ヶ月は少しも退屈しない。近くのスーパーに付いてゆき、買い物籠に好きな物を入れる。四人の子供がぞろぞろ妻の後を追いかけて楽しそう

だ。
食事も賑やかで楽しい。二朗が大学に入ってから二人きりの生活だったからなおさらである。風呂も四人で一緒に入る。最初の風呂のとき、研坊が渋って入らない、聞いても「ダッテー、ダッテー」とばかり。よく聞くと、取り替えたばかりのピカピカ光るステンレス風呂桶が気持ち悪いという。東京のは青いのだ。

その時のピカピカ風呂桶は、今でも我が家で健在だ。

私が出掛けない時、妻はデパートに連れて行く。何か買って貰うのが楽しみだ。四人一人々々個性があって面白いと妻は言っていた。章子は「コレ



と言つて一番先に決まる。

どれにしようかと迷つて決めかねている子、これでいいでしょと云われれば、喜んで決まる子、四人四様だ。

デパートに行くと言つと、着替えを始める。四人を連れて電車に乗って行く姿を思い出した。松島の遊園地や水族館にも連れて行つた。矢附に妻が連れて行つた時、いくらも居ないのに、自分の荷物を抱え、早く仙台に帰ろうと言つてきかない、仙台はお気に入りの様子だった。

翌年の夏、研と香が飛行機で二人だけで乗つて来た。羽田まで親に送つてもらい、乗務員に仙台のこう云う人が迎えに来ているからと頼む。ジュニアパイロットと云い、保護者が居なくとも、乗せる事が出来る。

着いてステア
ーデスさんに連れ
られて出て来た。
私を確認して
二人を渡す義務
がある。その必要
は無かつた、「叔
父ちゃん」と言つ
て走つて来て私
に縋りつく。今で
も「叔父ちゃん」
の幼い声が残つ
ているようだ。



矢附にて 征彦と研



松島遊園地で章子

近くの佐山さんのおじいちゃん
が、毎日の様に遊びにくる。
「よくこんな小さな東京の子が、
親元を離れ、毎日退屈しないで
遊んでいるものだ」と不思議が
っていた。

ある年、香を軽トラックの助手
席に乗せ、問屋に行った時、私
が車を離れた際に、ドアから体
をのりだし転落。オデコに裂傷
を受け、顔が血だらけになった。
私が香を抱き傷口を押さえ、問
屋の職員に運転してもらい、小
野寺外科で手当てして貰ったこ
とがあった。夜こうちゃんに知
らせた。傷口は残ったが、元氣
で帰って行った。今でも傷はあ
るだろうか。

小学校に入ってから、新幹
線で二人で来た時も、四人揃っ
て来た時もあった。毎年夏休み
を楽しみに、七、八年は来たと
思う。

その時の写真が多く残ってい
る。可憐で無邪気な顔を見る時、
自分達も若かった時代に立ち返
った気分になれるようだ。

平成十四年十月二十四日

